## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

行基菩薩、まだ若くおはしける時、智光法師に論議にあひ給へりけるを、智光、少し驕慢の心にやありけん、若き敵にあひたりと思へる気色なりければ、歌をよみかけられける。

まぶくだが修行に出でし片袴我こそ縫ひしかその片袴

かく言はれて、「二生の人にこそおはしけれ」と帰伏しにけり。

この事は、行基菩薩の先の身に、大和国なりける長者など言ひけるは、国の大領などやうのものにやありけん。その家の娘のいみじくかしづきけるが、かたちなどいみじくをかしかりけるを、門守する女のありけるが、子にまぶくだといふ童ありけり。十七八ばかりなりけるが、その家の娘をほのかに見て、人知れず病になりて、死ぬべくなりにける時、母の女そのよしをとひ聞きて、「我子生けて給ひてんや」と、洩らし言ひ入れたりければ、娘、「おほかたは安かるべきやうなる事なれど、むげにその童のさまにては、さすがなりぬべし。さるべからん寺に行きて、法師になりて、学問よくして、才ある僧になりて来らん時あはむ」と言はせたりければ、かくと聞きて急ぎ出で立ちける。「童の着るべかりける袴は持て来、我縫ひて取らせん」と言ひければ、母の女、忍びて参らせたりけるを、片袴をなん縫ひて取らせたりける。

さて、寺に行きて、師につきて、学問を夜昼しければ、二三年ばかりに、程なく、殊の外の智者になりにけり。さて、後来りければ、「今宵」と言ひてあひたりける程に、この娘、にはかに消え入るやうにてなくなりにけり。法師、あさましく悲しく覚えて、やがて寺に帰りて、道心深く起して、いよいよ尊くなりにけるぞ、智光法師なりける。されど、わが童名まぶくだといふ事、僧の中には、さしも知らせざりけるを、年経て、行基といふ若き智者の出で来りけるに、論議にあひたる程に、その昔の名をかく言ひて、「我こそ縫ひしかその片袴」と言ひけるに、思ひ続くれば、「わがもと道心起し始めし女は、すなはち、この行基にこそおはしけれど、わが身を尊き僧となさんとて、しばしかりに、その女と生まれて見えたりける」と、心を得るに、いよいよ尊くめでたくも恥も覚えけるなり。

（『古来風躰抄』上巻より）